

月刊 千葉労働

結成20周年
 新たな大躍進
 に向け出発!

ベアゼロ、年間臨給三・五カ月でも 思い切って我慢する

JR貨物労・緒方発言許すな!

JR貨物金田社長らは、「ベアゼロ、年間臨給3・5カ月」などという、断じて許すことのできない発言を繰り返している。冗談じゃない! われわれの怒りはすでに我慢の限度を超えている。貨物当局は誠意ある回答を行え!

緒方発言許すな

われわれがさらに怒りを抑えることができないのは、これに対するJR貨物労の対応だ。貨物労委員長・緒方は次のように言うのだ。(「公益企業レポート」での発言)

「昨年の年間臨給は四・二五カ月でした。経営側は今年三・五カ月などと言っているようですが、われわれも今までの経緯、生活がありますからそれで良いとはいきませんが、思い切って我慢しようと思腹をくくる覚悟です。」

一言の抵抗すらしようとせず、「ベアゼロ、年間臨給3・5カ月で」思い切って我慢しよう

と腹をくくる覚悟」とは、何と

という言い草か。会社の手先以下の連中だ。「組合員と家族の生活などどうなってもかまわない、自らの保身と会社に忠誠を尽くすことだけが自分たちの仕事だ」とでも考えているのか。それならば、「労働組合」などと名のすることは直ちに止めるべきだ。

しかも、分割・民営化という仕組みを根本的に変えないかぎり、何をやろうがJR貨物の経営危機が改善されるはずなどないことは彼ら自身も承知している。にもかかわらず、我慢すれば危機が突破できるかのようなベテンを流して、現場の労働者に一切の犠牲を強いるようなやり方は二重三重に許せない。

すべてを容認!

しかもそればかりではない。ベアゼロばかりか、これまでのレベルを遥かに超えた合理化攻撃に対しても次のように言う。

「労働時間に関して乗務員の人数や乗務キ口が大きな問題となっています。効率的な運用といった視点が堅

持されるのであれば、こういった問題にも踏み込んでもらっても構わないと考えています。」

「(転勤問題も)異動は絶対にないという意識を組合員には克服してもらおうよう働き掛ける。労働条件の変更があり得ることを社員全員が覚悟できれば、危機は突破できる。」

「一切合財会社の言うなりになれ。それを組合も現場の労働者にも強要する」ということだ。怒りなしには聞くことができない発言だ。

城石が取締役に

しかも、さらにそればかりではない。このように強弁する貨物労執行部は、自らの保身だけはしっかりと考えているのだ。前委員長・城石は、何と関連会社「JR貨物リサーチセンター」の取締役・副理事長にしっかりと

とおさまっているのだ。城石はバリバリの革マルだ。彼らは、「革命的マルクス主義」などと言いつつ、労働者を足蹴にして、

その犠牲のうえに自らだけが甘い汁を吸うことなど平気なのである。こんな連中に三くだり半を突きつけよう。今こそJR貨物労を解体しよう。

20周年迎えた親組合ととまじ

第11回家族会定期総会云開催

第十一回家族会定期総会が三月十三日開催されました。幼稚園の卒園式を翌日に控えた会員や乳母車を引いた会員が会場づくりから参加してくれました。

はじめに佐藤会長より「労働者や家族に犠牲を求める政治がどんどん強まってきている。こういう時に動労千葉が守りぬいてきた労働者の権利を守る闘い、団結が光るのだと思う。二〇周年を迎えた親組合とともに頑張っていこう」と挨拶がありました。

続いて中野委員長からは「時代は行き着くところのない大不況に突入した。一九二九年の大恐慌とちょうど同じ状態である。こうしたなかで日本はそこから脱出を新ガイドライン関連法を通して、戦争によって乗り切ろうとしている。動労千葉の結成二〇周年という大きな節目となる九九年は、のちに歴史の岐路として記憶されるだろう。『大失業と戦争の時代に通用する新しい世代の動労千葉を創りあげよう』のスローガンの下、今日

3・23第一波ストにつづいて、99春闘第二波ストに決起しよう。JR貨物の超低額回答を打破しよう!

一九九八年度役員

役職名	氏名	支部
会長	佐藤 正子	木更津
副会長	山田 佐知子	幕張
事務長	関 和江	津田沼
役員	古川 典子	千葉転
	国分 美沙緒	新小岩
会計監査	高野 寿子	総武
	石幡 明美	幕張